

環境福祉学会

News Letter

ニューズレター ● January 2006

3

目次

第1回年次大会開催概要①	1
第1回年次大会開催概要②	2
第1回年次大会開催概要③	3
第3回研究会概要①	4
第3回研究会概要②	5
第4回研究会概要①	6
第4回研究会概要②	7
お知らせ・事務局だより	8

環境福祉学会 事務局 東京都港区南麻布5-16-6 コウセイ広尾3F
創造学園大学 東京本部内
TEL.03-3447-3680 FAX.03-3447-3681
http://www.kankyofukushi.jp
E-mail: info@kankyofukushi.jp

環境福祉の誕生テーマに 第1回年次大会開催

環境福祉学会の第1回年次大会が昨年9月25日、岡山県倉敷市内の川崎医療福祉大学で開催され、90名が参加しました。年次大会テーマは「環境福祉の誕生」で、午前中には藤田八暉理事が座長を務める一般研究発表6件、午後からは炭谷茂アドバイザー（環境事務次官）による基調講演「環境福祉学の原理、領域、応用」と小池大哲副会長のコーディネートでパネルディスカッション「環境福祉の具体化を目指して」が行われました。

また、昼休みには、第1回の総会が行われ、第1号議案平成16年度決算案審議、第2号議案平成17年度事業計画案審議、第3号議案平成18年度予算案審議が行われ、原案通り承認されました。（詳しい内容は学会ホームページをご参照下さい。）

以下に一般研究発表と基調講演、パネルディスカッションについての概要について紹介します。



まず、大会開催にあたり、あいさつした江

草安彦会長は「環境福祉の原理と各地の実践を刺激として、輝く未来を実現することができるよう心から願っています」と述べました。

続いて、岡田喜篤年次大会実行委員長があいさ

つし、「環境福祉学会は、科学的視点のみならず、人間の生活問題や社会のあり方、人間観・自然観などを含む、いわば科学及び非科学をともに大切にする人間集団であることを目指す貴重な学会であると思いますので、多くの方々の参加を期待します。」と述べました。



江草会長



岡田大会委員長



炭谷アドバイザー

●環境福祉学会●
第1回 年次大会
開催概要

一般研究発表に入りま
すと、座長の藤田八暉久
留米大学教授のあいさ
つに続き、最初に社団
法人環境創造研究センタ
ーの児玉剛則氏による「環境

家計簿による環境と福祉を繋ぐモデル事業に関する
研究」についての発表がありました。

これは名古屋市にある障害者施設「ありんこ作業
所」における取組み事例で、作業所には環境家計簿
活動を地域の取組みの中核となる事務局として担っ
て頂き、「地球温暖化対策協議会」を設立するもの
です。協議会の名称を「ありんこ省エネ村」として、
作業所関係者や地域の方々に参加頂き、実際に各家
庭から使用された電気・ガス・水道
の使用量を作業所へ連絡し、これを
障害者の方々でも対応できるような
作業を工夫し、さらにその結果を各
家庭に返送するとともに、数ヶ月ご
とに環境家計簿活動参加者に活動状
況をお知らせしたり、「省エネ茶話
会」と称する少人数の集会を催すこ
とを検討しています。この活動は、
参加するすべての関係者が、地球温
暖化防止と障害者福祉の視点、さら
には地域づくりという視点のそれぞ
れに重さを認めてゆくことが必要で、関係する行政
期間からの支援も望まれますと述べました。

2番目は、東京成徳短期大学の寺田清美氏による
「高校生の視点から見る地球環境における子育て
(育児) バリアフリーの改善点」についての発表が
ありました。

この研究は、次世代育成支援の視点からも近未来
親になる可能性のある高校生が母親とあかちゃんと
共に乳母車を押し、地域の子育てバリアフリーの実
態調査です。その結果は、地域環境において、①放
置自転車や段差が多く、乳児を持つ親子に配慮した
状況にない。②乳母車を押しすと大回りの動きになる
ので狭い歩道は歩きに難い。③乳児にとって手の届
く位置に看板の針金等があるので、安心して歩ける

環境づくりが望ましい。④地下鉄の障害者トイレに
鍵が掛けられていたり、歩道に伸びすぎた植木の枝
が危険である事など、環境福祉に配慮したまちづく
りは行政側に任せるのではなく、私たちの提案が必
要です。これらの提案で環境が改善されれば、安全
で便利な福祉地域づくりが促進され、住民が安心し
て生活できる事に繋がりますと述べました。

3番目は、香川県立保健医療大学の獅々堀彊氏に
よる「使用済み自動車のシートを活用した高齢者向
け福祉機器の開発」—電動車椅子および運動支援機
能付き椅子への再利用—についての発表がありまし
た。

使用済み自動車のシートは、品質が保たれている
物でも破碎処分されているが、車椅子や椅子の座席
として活用できれば、省資源・廃棄
物の減量化ならびに高齢者福祉に役
立つ事が期待できます。乗用車シー
トを活用した椅子、車椅子は、①長
時間の座位においても苦痛が少ない。
②姿勢保持、褥瘡防止など安全
性が高い。など、高齢者の使用にお
いて安楽性及び安全性が向上し、日
常生活のQOLを高めることが期待さ
れると述べました。

4番目は、岐阜大学工学部客員教
授の木呂子豊彦氏による「河川にお
ける環境福祉」についての発表がありました。

川には、ストレス解消などの心の癒し効果が期待
できると共に河川空間における運動により、骨粗鬆
症、高血圧、糖尿病等の予防や治療効果が期待でき
るといわれています。こうした効果に注目して、福
祉の川づくり事業は、事業効率の面から周辺の病院
や水辺公園の存在に着目して事業が進められる事が
多く、関係者や近隣住民の参加に基づく計画作成を
経て、ゆるいスロープや手すりをつけた階段、段差
のない散策路、車椅子でも利用できる休息施設など
の整備が河川空間内で行われています。今後は、一
箇所ですべてを実現するのは、難しいことから、他
の河川や、森林など他の自然環境とのネットワー
ク化を前提にユニバーサルデザインの改善過程と人と



児玉氏



獅々堀氏



寺田氏



木呂子氏

の治療・回復過程に注目した計画づくりの提案がありました。

5番目は、岡山理科大学社会情報学科教授の井上聖太郎氏による「環境政策形成と環境福祉の歴史的な見方に関する一考察」についての発表がありました。

1970年代頃までには、我が国では環境政策における最も基本的な要素となる環境福祉がほぼ確立したと考えられます。しかし、権衡被害や自然破壊に対処する社会制度が整えられた時点で、地方自治体と国民は環境への関心から遠ざかってはいないかということ振替ってみるべきところにきているのではないかと述べました。

6番目は、岡山県新庄村村長の小倉博俊氏による「地域における環境福祉の実行」についての発表がありました。

高齢化社会やストレス社会が進行する中で、森林が持つ癒し効果に着目し、健康増進や疾病予防、リハビリテーション等に役立てる、健康づくりの場として森林を活用することに対する期待が高まっています。そのような中で新庄村では、ブナ林の癒しの森で健康保養基地（森林セラピー）の村を目指す構想を掲げ、①森林と差と山等を活用した健康づくりのための体制整備②健康と癒しの森利用計画に対する支援③普及啓発に取り組んでいます。また、森林の持つ健康保養機能については、そのエビデンスが不足していますが、森の木を切って売る事業から木を切らない事業への発想の転換と森を生かす森林産業創出へ取り組んで生きていくと述べました。



基調講演では、炭谷茂アドバイザー（環境事務次官）が、環境福祉学の原理、領域、応用と題して講演し、環境と福祉の融合による①ユニバーサル・エコデザインの製品の開発②環境福祉産業の創出③環境福祉のまちづくり（ウエル・エコ・ビーイング都市）を地域社会再生の中核にする事など提唱しました。



また、パネルディスカッションでは、小池大哲副会長（創造学園大学学長）司会の下、「環境福祉の具体化を目指して」をテーマに、横田健二・ヨコタ東北社長が「環境と福祉が繋ぐリサイクルの輪」と題する山形県新庄市にある福祉施設でのモデル事業について話題提供しました。藤原瑠美子・グリーンパートナーおかやま代表理事が、「環境福祉の発展を期待する一環境改善活動の立場から」と題する、岡山県を中心とした住民に対して、自然環境、社会環境、家庭環境、人間環境に関する改善事業の活動について話をしました。神戸大学の早川和男・居住福祉学会会長が「生活環境は福祉の土台」と題し、住宅・生活環境は社会保障・福祉の土台であり、人間が環境を作り、作られた環境が人間の福祉・生活

の質を左右すると話がありました。酒井哲夫・広見川夢の会会長が「ふるさとの自然（広見川）にかける夢」と題して、愛媛県の広見川における、さまざまな河川環境美化活動の紹介をしました。

そして、炭谷茂アドバイザーがコメンテーターとして、それぞれの取り組みについて感想を述べそれぞれの取り組みを高く評価をし、その後質疑応答に移り活発な議論がなされました。

最後にまとめとして、小池大哲副会長が、今環境福祉ビジネスを推進できる人材・環境福祉の街づくりを提案できる人材が必要になってきているので、今後は小委員会を設置して、この人材育成の課題に取り組む成長することが大切だと述べました。



井上氏



藤田座長



小倉氏



小池副会長



パネルディスカッションの様子

「環境福祉ビジネスの取組み I」

株式会社アイ・アール・エム 代表取締役社長
椎名 正隆

第3回目の事例研究会が、6月18日(土)に東京都港区の環境福祉学会事務局で開催されました。環境福祉ビジネスの取組みについて、2つの事例が発表されました。まずは、株式会社アイ・アール・エムの椎名社長による、農業の循環機能を重視した野菜づくりと福祉の連携についての発表概要について紹介します。



私たちは「農業の循環機能を重視した畜産と野菜づくりの連携」に取り組んでいます。千葉県銚子で畜産経営をしていましたが、10年前に環境保全型農業に取り組む銚子育苗と一緒に、畜糞を何とか良質の堆肥に加工しなければならないとリサイクルに挑戦し、2002年に食品リサイクル法の登録再生利用事業者の第一期生となりました。

全国にIRM (Integrated Recycle Management) を広げようと、まずは農林水産省の食堂残渣を始めました。リサイクルに際し、一般廃棄物処理業と産業廃棄物処理業の許可をなぜ取らなければならないのか問題にしましたが、5年掛かって許可を取得しました。

また、破綻したゴルフ場の一部の1万坪を競売で取得し「循環の郷 銚子」を立ち上げました。排出企業などと農家を結び、食品リサイクルの連鎖を構築することにより、堆肥化処理やエネルギー回収などの施設の運営と、減農薬・減化学肥料による農業生産を推進しています。堂本千葉県知事の認証も頂いています。

スーパーや企業などから排出される生ごみや、地元の畜産農家から牛糞を回収、再生された堆肥を野菜生産者が有機肥料として使用し、生産された野菜の一部を生ごみ収集先のスーパーやファミリーレストランなどに出荷しています。

今度、1万坪あるこの「循環の郷 銚子」のうち、2000坪の一角を使い、高齢者福祉グループホームと知的障害者グループホームを併設したいと考えています。

福祉事業として高齢者や知的障害者の方々にも充分できるものもたくさんあります。一例では、新築現場の冷蔵庫やテレビといった製品などは、すべて全部新しい梱包材に入っており、それをうまく分別できればきれいなうちに分別できます。

もう一つは、成田空港、羽田空港等に60%の食材が輸入されていますが、それらはほとんど梱包材に入っています。それを前のところで分別するセンターをつくれれば、汚くならないうちにほとんど全部をリサイクルでき、また原料になります。そのための場所を確保し、自治体の協力を受けてセンターの許可を受けると、十分きれいなうちに資材が集まります。一番のキーマンは自治体の方なので環境福祉という面からも応援して頂きたいと思っています。



また、地元の農業生産法人やリサイクラーらと一つのセンターをつくり、野菜を生産します。大量生産、大量販売で20種類以上の野菜を手掛けます。今日できたものも宅配業者に頼めば翌日にはお店に十分間に合います。銚子は春にはカツオ、秋にはサンマ、それからキャベツやダイコンと色々なものを一緒に詰めて宅配便で送れます。考えてみると、銚子産だけでも宅配で十分、たくさんものを供給でき、本当に恵まれています。

更に、いま私は「来たれ団塊の世代」ということを言っています。あと二、三年すると昭和二十二年生まれの方々が定年退職します。60歳はまだまだ若いのです。団塊の世代が皆で力を合わせ、「循環の郷・銚子」、「循環の郷・袖ヶ浦」、「循環の郷・山梨」といった郷シリーズを皆で協力しながら日本全国に広めて行きたいと思っています。まずは児童の学校給食の野菜くらいは私たちがつくってあげようという気持ちを持っていたら、十分シェアもあり稼ぐことができるでしょう。

郷シリーズの中で、畑の取得は一人では難しいですが、私たちのような法人もあります。農水省の登録再生利用の認可も持っているのですから、あらゆるところに進出することができます。

この「循環の郷」を、団塊の世代の方々の知恵と資金を借りながらつくって行ければと思います。農的生活会員として300戸募集しました。300人に5坪の農地を与えても、ほんの一部に過ぎません。

日本では今後、農業者がどんどん少なくなってきます。しかも少子化もどんどん進んでいます。その打開策として、ニートの若者に一生懸命稼いでもらい、子供をつくってもらわないと日本は滅びてしまいます。

我々は団塊の世代とともに、郷シリーズで彼らの何かしらの力になればと思います。IRMまた農業生産法人として、国が進めているこの循環型社会の構築というテーマの実現に向けて、今後とも取り組んで行きたいと思っています。

このように、ウェルネスファーマーとして、知的障害者や高齢者、そして団塊の世代が力を合わせ、資源を十分循環させながら、また自然界へ戻すことに取り組んでいきたいと思っています。

「環境福祉ビジネスの取組みⅡ」

三協興産株式会社 代表取締役
花澤 義和

続いて、三協興産株式会社の花澤社長による、ホームレスの方の社会復帰を後押しする取り組みの概要を紹介します。



弊社のある川崎市には、全国的に見てもホームレスの方がたくさんおられます。神奈川新聞の記事によると、川崎市が八百数十人と首都圏で一番ホームレスの方が集まっているといわれています。

この人達と日常接していて、彼らの中にも社会復帰を真剣に考えておられる方がいるだろうと思います。この人達の一人ひとりの半生、思いには、年齢の幅もあるので色々異なると思いますが、就業の後押しを行政が一体となってやらなければいけないと思ってきました。

川崎市には「愛生寮」という施設があり、そこでホームレスの方にシャワーを浴びたり、下着を替えたりして一週間過ごして頂き、その間に社会復帰をしなければというインセンティブを与えようというものです。

それは立派なことですが、一週間経って外に出ると元に戻ってしまいます。それ以上、行政も追いきれていません。そこで私たちが阿部市長に直訴し、川崎市がホームレスの方の就業後押しに手を挙げることになりました。

一方、弊社の事業の柱の一つに食品リサイクルがあります。工場は、昨年に新工場が完成するまで三井埠頭という道路一本離れたところの倉庫内にあり、そこで10年間、小さな設備で色々な研究や技術開発に取り組んできました。今回のプラントには大手メーカーの機械は一切入っておらず、私たちのノウハウを積み重ね、価格的には約50%で設備ができました。

食品の破碎から分別までラインのやり方を自社の技術で磨き、中堅の機械工場にOEMの形でお願いしました。首都圏で軌道に乗ると、この工場のコンセプトをそっくり、全国何カ所かに展開して行けると計画して工場を作りました。

この食品リサイクル工場の選別ラインで、ホームレスの方に働いて頂くことを検討してきました。昨年九月以降、新工場の完成と同時にテストラインに入りたかったのですが、それには間に合いませんでした。

ホームレスの方々には年齢に幅があり健康状態も様々なので、まず健康のカウンセリングを専門家がすることになりました。それで、社会復帰のため健康上の問題がなければ、その中からエントリーして頂き、働く意欲のある人に今後ラインで働いて頂こうと考えています。

私たちは昨年最初に手を挙げましたので、京浜臨海部あるいは首都圏で初めてのケースになるのではないのでしょうか。まずは第一ラウンドとして、報道によると9月に協議会が設置され川崎市にも一カ所拠点ができるということなので、市



とともに協議会をリードするよう提案してみたいと考えています。

そのほか、今大きな問題となっている土壌汚染の対策でも、福祉と相当の接点ができるだろうと思っています。

中小企業も大企業も今、資産リストラをしています。資産を売却してどれだけ残るのかというのが売却する側の一つの考え方です。そうすると、土壌汚染対策法に準じて対策を講じると、結局どれだけ手元に残るのかというのが地主の考えになっています。これでやはり土地の再生、再利用が進まない部分が今出てきていると思います。

そういう汚染された土地を低コストかつオンサイトで浄化できる技術が出てくれば相当貢献する余地が出てきます。それら技術のハンドリングの中には単純な土木作業もあり、この分野で雇用を増やすこともできるのではないかと考えています。

私は「環境国際総合機構」というNPO法人の立ち上げに参画しましたが、それは「環境問題を解く鍵はやはり人間なんだ」という思いからです。自然と命の甦生をつなぐ知恵の輪が最終的に融合すれば問題の解決に至るのだろうと思ひ、この知恵の輪を機能させるための場を提供することが必要だと考えました。

会社創業以来25年、その間、アスベストやBSE対策などを始め環境分野の現場で一貫して取り組んできましたが、これからは福祉というテーマにも積極的にチャレンジして行きたいと思っています。自分の仕事、目的を持たないとやはり人間は生ききれない。そういう意味で何としてもこの福祉の分野で一人でも多くの人達が社会復帰し、人間として自立して頂きたいと強く思っています。

「自然環境による町おこし」

宮崎県日之影町町長
工藤 訓

第4回目の事例研究発表会が、8月27日(土)に東京都港区の環境福祉学会事務局で開催されました。今回は、「環境による人間回復」をテーマに、2つの事例が発表されました。まずは、宮崎県日之影町の工藤訓町長による、「自然環境による町おこし」についての発表概要について紹介します。



私たちの町は大分県を背にして県境にあり、東西9km、南北30km総面積は277km²です。町の92%以上は森林で占められており、自然環境と豊富な山村文化を抱いた、農業と林業が基幹産業の町で、人口は現在5,300人です。「橋と渓谷と温泉の町」をキャッチフレーズとして、「自然の恵みが人を呼ぶ里」をコンセプトにまちづくりを進めています。日之影町の由来は、日の照らない町という解釈がよく誤解されますが、宮崎県というと非常に神話が多いところで、一連の神話にまつわる地名であるをご理解いただければと思います。

さらに日之影町は深い山河、あるいは森に恵まれていますから、川の恵みも非常にすばらしく、アユの宝庫として全国に知れ渡っています。ヤマメ関係も非常に多く、ヤマメについてはキャッチ・アンド・リリース区間を設置して、釣りを楽しんでいただいています。これらの川の恵み、山の恵みというものが、森林セラピー基地の調査認定を受けており、今後さらにそういうものを加えていけば、基地としての価値が高まるのではないかと考えています。

さらに加えて、日之影町は橋の町としても有名で、町内を走る国道、県道、町道、林道、農道の中に230以上の橋があります。その中で、国道橋の青雲橋がアーチ型の橋として、林道橋に架かる橋の中で、龍天橋が、農道橋の天翔大橋が日本一の規模であり、これら日本一の3本橋がそろい、三大橋としていろいろな催しをしています。特に天翔大橋は、多数の賞を受賞している橋でもあり、国際的にも建造物として非常に有名です。また、橋の真ん中には、風力を付けており、その風力を利用して橋の照明を行っているので、教育の面においても非常に高く評価されています。

私は町長になる時に、まず、美しい自然環境、教育・文化の香りの高いまちづくりを目指そうと、住民の皆さんにお約束しました。二つ目は、健康に輝くまちづくりに取り組み、保健・医療・福祉を充実する。三つ目は行財政改革です。四つ目が、地の利、山村の産業振興にどう取り組むかということです。

これから少子化が進み、高齢化が進んでいきます。日之影町では1年間に産まれる子供は34、5人くらいです。一方で65歳以上はその何倍も増えています。その中でいかに子供たちの能力を磨いていくか。これはきわめて大事なことから、私は町長になったときから1番にこれをやらなければ



いけないという思い取り組んできました。

2番目の、健康に輝くまちづくりについては、保健・医療・福祉の充実を掲げて、その整備に力を注いでまいりました。15年に病院の移転改築もやり、それまで町には健康づくりの拠点である保健センターがありませんでした。そこで保健センターをつくり、横には特別養護老人ホームの完全ユニット型をつくりました。

4番目の産業振興への取り組みですが、これは容易ならざることであり、山村の再生、山村産業の再生に向けた基本的な取り組みをしていかなければいけません。いまの木材は切っても血も出なければ涙も出ないという状況で、何とかしなければいけないと思っています。農業では、米を中心に、たばこ、果樹・野菜、あるいは花き、畜産といったものが通常の取り組みで、さらに新しく、ほおずき、最近では糖度が18度ある完熟金柑等が植栽されて、いま市場で非常にいい評価を得ています。また、森というのは、酸素同化作用を非常に活発にやってくれます。そして、水の浄化をし、さらに人間の心の浄化もしてくれます。森は、そういう非常に高い機能を持っているので、これからいかにすばらしい森づくりをしていくか、後世に延々とつないで守らなければいけません。

17年度からは、匠の里づくりをスタートさせ、「一地区・一資源・一宝づくり」という一つの構想を立てました。その地区の個性の掘り起こし、魅力のあるものを掘り起こして、それを磨いていく。あるものを最大限に生かしたまちづくりをしようという取り組みです。

その中で、森林セラピー基地づくりがあり、何としてでも森林セラピーに向けて進めていきたいと思っています。

さらには新サポーター育成事業として、農業の基盤づくりをするために、後継者をつくらなければなりません。その地域にあるものを最大限に生かしたいろいろな考えで、皆さんが集まり、やる気を持って取り組んでいくシステムにしていかなければならないと思います。それに森林セラピーが本格的に位置づけされるとするならば、その効果は計り知れないものに育つのではないかと考えています。

「不登校・ひきこもり児童生徒の 環境教育による支援事業」

NPO法人青少年自立センター 理事長
工藤 定次

続いて、NPO法人青少年自立援助センターの工藤 定次理事長による、不登校・ひきこもり児童生徒の環境教育による支援事業についての発表概要について紹介します。



炭谷事務次官から2年前に、教育における支援事業を研究委託でやらないかという話がありました。私は30年近く、不登校や引きこもりの子と宿泊型で付き合ってきたのですが、環境でどうやって「こころの回復」事業がなされるのかという問題には当惑してしまいました。

新たな事業であれば新たなことを展開しなければ意味がないし、その効果性は一体どういうものかを考えなければならず、少し困ってしまいました。本当に自然に触れて何か「こころの回復」が図れるのか、評価点として如実に出るのかという問題は、周辺のいろいろな方から指摘されて、反論することはできませんでしたが、3年近くになって、「効果はある」と言えるような段階に至ったと思っています。3年間ずっと、ある子供たちあるいは青年を追いかけて、何が変化したかということが結果として見えてきたからです。

私たち実践者は、不登校、ひきこもり、あるいはニートと呼ばれる人間の心の奥底について、身体のさりげない仕草によって回復しているかないかということが、経験値からわかります。それは、ものを食べること、歩くこと、笑うことなど生活におけるリズム感に着目しているとわかってきます。例えば、そういう子供たちは食べることに、ご飯、おかず、味噌汁だけを単品で食べたり、ソース、マヨネーズをかけて混ぜ合わせて食べたり、間をあけて食べたりと、普通に食べることが出来ないことが多いです。笑うことについては、素直な笑いかたが難しいようで、声を出して笑わない状態です。

その他で多いのは、髪の毛や帽子で顔を隠して表情を見せないようにすることです。その中でも驚いたのは、パンダのかぶりもの物をかぶって生活している子や、小学校3年生から中学2年まで学校に行かずにパソコンをやっていたために、能面のように全く表情がない子がいたことです。

このような子供たちをどうするかをいろいろ考えました。まず一つは、不登校の子の家に行って、その子を誘ってくるという行動をとること。二つ目は、自然に関することを職としているような人との交流を図ることをしていこうと考えました。

その中で主眼は、親元から離すことを多くしようというのが一つのスローガンでした。子供同士あるいは本人で成長するという時間、あるいは親子がもう少し客観的になって、密着ではない時間帯をつくったほうが良いと思い、合宿はか



なり頻繁にやりました。

極めつけは、9泊10日という超ロングランの北海道合宿を去年と今年行いました。

周りからは無謀ではないかと言われましたが、これは結構、成果があったのではないかと考えています。もちろん自然の中で、五右衛門風呂をつくって木で燃やすとか、いろいろなことをやりました。

そして、地元の子供たち、学校に行っている子供たちとの交流をもち、行ったチームの中で3分の1ほどは実際、学校に行っている子に参加してもらいました。不登校の子だけで行っても成果が少ないということと、もう一つは不登校の子が多数でなければ圧倒されてしまうだろうから、少数に参加してもらいました。

合宿では、河原や山をかなり歩きます。歩くという作業は、かなり効果があると思います。どういう歩き方をしたら疲れないから始まり、当たり前前に歩くことが心地よくなり、リズム感がでてきます。不登校や非行の子たちに何をするのかと言われると、当たり前前のリズムで、当たり前前の生活をするということが目標なのです。

当たり前前の生活は何かというと、太陽が出たら起きるところから始まり、三度の食事をとる、あるいは体を動かす、勉強するといったことです。当たり前前のリズムを取り戻すことはものすごく重要で、歩くこととか、農作業もかなり良いかと思っています。泥の中で田植えをしたり、川で魚を追いかけるのもいいのかもしれませんが、川の中には石ころがあり、その中でバランスをとるのは難しく、体全体のバランスを正しくするには有効かと思っています。

その後、どのように変わったのかというと、普通に声が出る、目を合わせる、食べることができる、笑えるようになり、是正されるとかなり違ってきて、何名かは学校に行き、仕事もするようになりました。合宿やいろいろな経験をすることによって、その経験を親子で話す機会が多くなったのも良かったと思います。このことは、確実な成果ではないかと思っています。今後は、すべてのシートを見て、分析は必要だと思えますが、目に見える上ではどこに着目して、どういうことをすれば、その本人がある種の段階を克服できるのかというのは、少し追えたのではないかと考えています。

お知らせ

①第2回年次大会(総会)の開催が決まりました。

◎開催日：2006年10月29日(日) ◎テーマ：「環境福祉の発見」

◎会場：創造学園大学本部 〒370-0861 群馬県高崎市八千代町2丁目3番6号
(八千代キャンパス) (下滝キャンパス) (中山キャンパス)

研究発表の募集につきましては、詳細が決まり次第ご連絡致します。

②学会ホームページで平成16年決算と事業報告及び18年度予算を掲載しておりますのでご覧下さい。

アドレスは以下のとおりです。

<http://www.kankyofukushi.jp>

なお、法人会員の方でホームページにリンク集に掲載をご希望される方は、会社・団体名、お名前、連絡先、ホームページアドレスと、50文字以内の事業説明文を事務局までお送り下さい。



■環境福祉学会組織及び役員一覧

会 長	江草 安彦	社会福祉法人旭川荘理事長／川崎医療福祉大学名誉学長
副 会 長	鴨下 重彦	社会福祉法人賛育会 賛育会病院院長／東京大学名誉教授
	小池 大哲	創造学園大学学長
	伊藤 達雄	名古屋産業大学学長
理 事	松寿 庶	社会福祉法人全国社会福祉協議会常務理事
	波田 幸夫	環境新聞社社長／社団法人日本専門新聞協会理事長
	長田 逸平	日本経済団体連合会上席参事
	藤田 八暉	久留米大学教授
	土井 康晴	社団法人生活福祉研究機構専務理事
	泉谷 直木	アサヒビール株式会社常務取締役
	安川 緑	金沢大学大学院医学系研究科助教授
	児玉 剛則	社団法人環境創造研究センター専務理事
	寺田 清美	東京成徳短期大学助教授
監 事	永井 伸一	獨協中学・高等学校校長／獨協医科大学名誉教授
	平野 寛	日本柔整専門学校校長／杏林大学名誉教授
アドバイザー	炭谷 茂	環境事務次官
事務局	小内 栄	創造学園大学事務長
	小峰 且也	環境新聞社常務取締役
	酒井 剛	環境新聞社企画事業本部課長
	王 豊	創造学園大学東京本部所長
	澤井 晴乃	創造学園大学東京本部次長

事務局だよ!

遅くなりましたが、ニュースレター第3号が発行の運びとなりました。

この間、第1回年次大会が、岡山県倉敷市の川崎医療福祉大学で開催され、全国から多数の会員の皆様、また岡山県内の環境福祉に関心を持つ皆様にご参加をいただき、大会テーマであります「環境福祉の誕生」にふさわしい大変意義ある大会となりました。

第2回年次大会は、群馬県高崎市の創造学園大学におきまして、「環境福祉の発見」をテーマにこの秋に開催されます。東京駅から上越・長野新幹線で約50分で着きますので、ぜひ会員の皆様がこの積極的なご参加、ご支援をよろしくお願い申し上げます。